

[愛知大学]

学生たちの願いが生んだ時を刻む塔 —愛知大学に響く「自由・受難の鐘」とその由来—

藤田 佳久 愛知大学名誉教授・同東亜同文書院大学記念センター元センター長

1 愛知大学の誕生

愛知県豊橋市の市街地に南接する丘の上に旧制「愛知大学」が豊橋予備士官学校の施設跡地に認可開設されたのは、終戦直後の1946年11月15日のことであった。

しかし、それは全くの新設ではなく、終戦まで大陸上海にあった旧制「東亜同文書院大学」をルーツ校とし、文部省（当時）の誘導もあって、大陸各地や日本の植民地で終戦により学校を失った旧帝大や大学、高専校などの学生たちも受け入れ、「愛知大学」（以下、愛大）として開学した。入学者は書院生が最も多かったが、出身校は80余校に及び、まさに「引揚げ総合大学」、「ア

ジア文化大学」の様相を示した。そのため入学生は編入生が多く、予科3年、学部3年、計6学年分の授業を一斉に開講した。さらに空襲で焼け野が原になった東海地方の各都市で、学ぶ機会を失っていた市民、勤労者のために全教員が各都市に向き「土曜講座」を開講。受講生がすぐに1万人を超え、「修了証書」の発行依頼が大学へ殺到したことから、大学は正規の夜間部を豊橋、名古屋両キャンパスに増設した。こうして愛知大学は、昼はトップレベルの旧制大学生から、夜は市民、勤労学生まで、幅広く、多種多様な多くの学生を相手に授業を展開した。そこに愛知大学の誕生の原点、そして特徴があった。

2 「自由・受難の鐘」の登場

そしてこの多くの授業の終始時刻を伝えたのが、物資不足の折柄（おろから）、本部事務棟に隣接し、各教室等に近い松の木に吊り下げられていた鐘であった。用務員さんが毎授業時間ごとにその鐘を打ち鳴らす。その音色は全学生、教職員の胸に刻み込まれていった。

そんな折、第4回卒業生たちがその鐘の姿に寂しさを覚え、愛大の時計台にすべく2本の柱と屋根を寄贈し、その柱に

「自由・受難」の文字を刻んだ。それは当時学監であった小岩井淨先生の「観取命運自在」の書からのヒントであった。その意味は、この寄贈代表の藤田稔氏によれば、「自由を求めれば、苦難は必然避けられないものだ」ということで、改めて「愛大の原点に立ち返り、真の鐘を鳴らしてゆきたい」という卒業生たちの願いと学園の志があった。

3 愛大にとっての「自由・受難」史

当時の愛大には書院生たちの雰囲気もあった。彼らは上海の書院生時代、日中友好と連携への強い志を持っていたが、1943年、政府の学徒出陣や勤労に動員され、その志への理不尽さを抱え、戦場へ赴かざるを得なかった。本間喜一学長・院長は内地の学長とは違い、「生きて帰ってこい」と書院生を送り出した。学長も書院生も「自由」への距離と自由の価値を噛みしめたに違いなかった。

また、戦後の1949年の大学学制改革で新制大学が各地に誕生するが、地元名古屋大学は文科系学部新設に当たり、人材不足から愛大の人材を求め、愛大との合併案を提案してきたことがあった。それに対して、愛大では教員と学生が数回にわたる集会での議論の結果、その提案を断っている。そ

の大きな理由は、戦時下で行った政府による大学への干渉への懸念であり、「私学」の「自由」の価値を選択したのであった。そして、この「自由・受難の鐘」の塔ができた翌1952年、深夜の構内に不法侵入してきた不審者2人組がいた。これに気づいた寮生が取り押さえたら、警察官であったということで、逆に彼が、そして寮生の一部までもが逮捕されるといふ理不尽な事件が発生した。「愛大事件」である。詳細は省くが、折しも最高裁事務総長から愛知大学学長に復帰した本間喜一は、あくまでも学生の立場を信じ、擁護したことで、学生たちから絶大な信頼を得、それにより、新生愛大は一つにまとまった。まさに「自由・受難」の精神は、全愛大学園関係者に強く響いたに違いなかった。今でも「自由・受難の鐘」は、学内を見続け、その精神を伝えようとしている。



手前が「愛知大学設立趣意書(抄)碑」、奥は「亜細亜友好記念碑」、そして中央が「自由・受難の鐘」(豊橋校舎にて。名古屋校舎にも建てられている)